令和８年度（2026 年度）（第２期試験）

東北大学大学院教育学研究科博士課程

（前期２年の課程・一般選抜）
入学試験問題　外国語科目（英語）

注　意

1　試験時間は**９０分**。
2　問題紙は　6　枚（表紙を除く）、解答紙は　4　枚。
3　設問Ⅰ、設問Ⅱの解答はそれぞれ別の用紙に記入すること。
4　全ての解答紙に受験記号番号を記入すること。
5　辞書の持ち込み不可とする。

【設問 I】次の英文を読み、以下の問題に答えなさい。ただし、人名については原文表記のままでよい。

ここに下記文献の抜粋が入ります。

Dillard, N., Sisco, S., & Collins, J. C. (2024). Expanding Experiential Learning in Contemporary Adult Education: Embracing Technology, Interdisciplinarity, and Cultural Responsiveness. *New Directions for Adult and Continuing Education*, 2024 (184), pp.30-38.

（p.31 左段の大見出し Traditional Models of Experiential Learning の最初から、p.32 の左段 8 行目まで掲載）

また、次の部分に下線を付してあります。

下線部① p.31 左段の大見出し Traditional Models of Experiential Learning の最初の段落の 5 行目、a concrete experience。

下線部② p.31 右段の上から 4 行目、Learners analyze から、同段落終わりの learning and development. まで。

下線部③ p.31 右段の上から 25 行目、It supports insights から、上から 27 行目、future actions.まで。

下線部④ p. 31 右段の下から 13 行目、The cyclical process から、同段落終わりの across various learning contexts.まで。

下線部⑤ p. 31 右段の下から 9 行目、Kolb's model から、下から 7 行目、relatively seamlessly. まで。

注）ELT: Experiential Learning Theory の略

(Dillard, N., Sisco, S., & Collins, J. C. (2024). Expanding Experiential Learning in Contemporary Adult Education: Embracing Technology, Interdisciplinarity, and Cultural Responsiveness. *New Directions for Adult and Continuing Education*, 2024 (184), pp.30-38.　より作成)

問題１　下線部①に記される「a concrete experience」について、本文にある具体例を日本語で記述しなさい。

問題２　下線部②を日本語に翻訳しなさい。

問題３　下線部③を「It」の指し示すものを明示して日本語に翻訳しなさい。

問題４　下線部④を日本語に翻訳しなさい。

問題５　下線部⑤を日本語に翻訳しなさい。

【設問II】次の英文を読み、以下の問題に答えなさい。ただし、人名については原文表記のままでよい。

ここに下記文献の抜粋が入ります。

Stanovich, K. E. (2021). The Many Faces of Myside Bias. In *The Bias That Divides Us: The Science and Politics of Myside Thinking*. (pp.1-26), The MIT Press.

（p.4 の大見出し The Terminology Confusion: “Confirmation Bias,” “Belief Bias,” and “Myside Bias”に続く段落のはじめから、p.6 の下から 3 行目の the mice syllogism easy. まで掲載）

また、次の部分に下線を付してあります。

下線部① p.4 の下から 6 行目、one carefully defined sense。

下線部② p.4 の下から 6 行目、Indeed, as から、下から 2 行目、too many different effects. まで。

下線部③ p.5 の下から 13 行目、It is not necessarily から、下から 10 行目、reasoner encounters it まで。

下線部④ p.6 の 7 行目、Unlike confirmation bias から、11 行目、world まで。

下線部⑤ p.6 の下から 14 行目、And if you did から、下から 11 行目、living things. まで。

注）positive test strategy: 肯定的検証方略、syllogistic reasoning: 三段論法

(Stanovich, K. E. (2021). The Many Faces of Myside Bias. In *The Bias That Divides Us: The Science and Politics of Myside Thinking*. (pp.1-26), The MIT Press.　より作成)

問題１　下線部①に記される「one carefully defined sense」とは、具体的にはどのようなことか。日本語で説明しなさい。

問題２　下線部②を日本語に翻訳しなさい。

問題３　下線部③を日本語に翻訳しなさい。

問題４　下線部④を日本語に翻訳しなさい。

問題５　下線部⑤を日本語に翻訳しなさい。

令和８年度（第２期試験）

東北大学大学院教育学研究科博士課程

（前期課程・一般選抜）
生涯教育科学コース
入学試験問題（専門科目）

注　　意

1　試験時間は１２０分。
2　問題紙は　1　枚（表紙を除く）、解答紙は　2　枚。
3　解答は問題番号を明記し、それぞれ別の解答紙に記入すること。

問 I　スポーツと LGBTQ＋に関する具体的事例を取り上げ、あなたの考えを論じなさい。

問 II 人類学や社会学におけるフィールドワークについて説明し、あなたの研究におけるその意義と注意点について論じなさい。

令和８年度（2026 年度）（第２期試験）

東北大学大学院教育学研究科博士課程

（前期２年の課程・一般選抜）
教育政策科学コース
入学試験問題（専門科目）

注　　意

1　試験時間は１２０分。
2　問題紙は 4 枚（表紙を除く）、解答紙は 3 枚。
3　設問Ⅰ（共通問題）は全員解答すること。また、設問Ⅱ（選択問題）については、問題紙中に志望する専門領域ごとの問題選択の方法が記してあるので、それに応じて問題を選択の上、解答すること。
4　解答は、問題番号を明記の上、設問ごとの指示にしたがって記入すること。
5　全ての解答紙に受験記号番号を記入すること。

設問Ⅰ：共通問題（全員解答すること）

　次の表は、文部科学省の「令和7年度（令和6年度実施）公立学校教員採用選考試験の実施状況等」のうち、「第4表　受験者数、採用者数の学歴（出身大学等）別の内訳」を示したものである。この表を見て、次の問いに答えなさい（問1～3への解答を解答紙1枚に収めること）。

【問1】　この表が示している情報がどのようなものであり、どのような形でそれらが示されているのかについて、調査主体である文部科学省の問題意識や関連する制度を念頭に置いて説明しなさい。

【問2】　この表は単年度の情報を示すものである。もし過去のデータを十分な年度分得ることができたと仮定して、どのような情報を得ることができるか、記述しなさい。

【問3】　この表から政策課題を記述したうえで、それを解決するための教育政策を論じなさい。

第4表　受験者数、採用者数の学歴（出身大学等）別の内訳

区分			小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	養護教諭	栄養教諭	計
受験者	国立教員養成大学・学部	人数	7,920 (7,710)	5,150 (5,186)	2,391 (2,320)	1,165 (1,188)	1,234 (1,151)	5 (3)	17,865 (17,558)
		比率	23.0% (21.1%)	14.1% (13.2%)	12.1% (10.8%)	16.1% (15.0%)	13.0% (12.1%)	0.3% (0.2%)	16.4% (15.1%)
	一般大学・学部	人数	24,156 (26,060)	28,428 (30,554)	14,542 (15,870)	5,382 (6,009)	6,657 (6,620)	1,284 (1,284)	80,449 (86,397)
		比率	70.2% (71.5%)	77.6% (77.8%)	73.8% (74.1%)	74.2% (75.9%)	70.1% (69.5%)	79.7% (80.9%)	73.7% (74.4%)
	短期大学等	人数	1,025 (1,203)	574 (635)	79 (106)	208 (208)	1,393 (1,533)	264 (252)	3,543 (3,937)
		比率	3.0% (3.3%)	1.6% (1.6%)	0.4% (0.5%)	2.9% (2.6%)	14.7% (16.1%)	16.4% (15.9%)	3.2% (3.4%)
	大学院	人数	1,333 (1,486)	2,469 (2,898)	2,693 (3,126)	497 (513)	215 (218)	59 (49)	7,266 (8,290)
		比率	3.9% (4.1%)	6.7% (7.4%)	13.7% (14.6%)	6.9% (6.5%)	2.3% (2.3%)	3.7% (3.1%)	6.7% (7.1%)
	教職大学院	人数	638	769	555	131	66	7	2,168
		比率	1.9%	2.1%	2.8%	1.8%	0.7%	0.4%	2.0%
	計	人数	34,434 (36,463)	36,621 (39,278)	19,705 (21,425)	7,252 (7,920)	9,499 (9,522)	1,612 (1,588)	109,123 (116,196)
採用者	国立教員養成大学・学部	人数	4,892 (4,671)	2,386 (2,267)	824 (773)	741 (691)	259 (255)	1 (1)	9,103 (8,658)
		比率	28.6% (27.8%)	23.5% (23.1%)	16.0% (15.7%)	20.3% (19.5%)	22.3% (22.0%)	0.6% (0.6%)	24.4% (23.8%)
	一般大学・学部	人数	11,089 (11,024)	6,896 (6,611)	3,486 (3,245)	2,575 (2,554)	785 (754)	140 (149)	24,971 (24,337)
		比率	64.9% (65.6%)	67.8% (67.3%)	67.7% (66.0%)	70.5% (71.9%)	67.4% (65.2%)	85.9% (86.1%)	66.8% (66.8%)
	短期大学等	人数	397 (431)	131 (135)	30 (52)	85 (83)	87 (113)	18 (20)	748 (834)
		比率	2.3% (2.6%)	1.3% (1.4%)	0.6% (1.1%)	2.3% (2.3%)	7.5% (9.8%)	11.0% (11.6%)	2.0% (2.3%)
	大学院	人数	700 (667)	755 (817)	812 (847)	249 (223)	33 (35)	4 (3)	2,553 (2,592)
		比率	4.1% (4.0%)	7.4% (8.3%)	15.8% (17.2%)	6.8% (6.3%)	2.8% (3.0%)	2.5% (1.7%)	6.8% (7.1%)
	教職大学院	人数	362	323	215	74	13	0	987
		比率	1.1%	0.9%	1.1%	1.0%	0.1%	0.0%	0.9%
	計	人数	17,078 (16,793)	10,168 (9,830)	5,152 (4,917)	3,650 (3,551)	1,164 (1,157)	163 (173)	37,375 (36,421)
採用率（%）	国立教員養成大学・学部		61.8% (60.6%)	46.3% (43.7%)	34.5% (33.3%)	63.6% (58.2%)	21.0% (22.2%)	20.0% (33.3%)	51.0% (49.3%)
	一般大学		45.9% (42.3%)	24.3% (21.6%)	24.0% (20.4%)	47.8% (42.5%)	11.8% (11.4%)	10.9% (11.6%)	31.0% (28.2%)
	短期大学等		38.7% (35.8%)	22.8% (21.3%)	38.0% (49.1%)	40.9% (39.9%)	6.2% (7.4%)	6.8% (7.9%)	21.1% (21.2%)
	大学院		52.5% (44.9%)	30.6% (28.2%)	30.2% (27.1%)	50.1% (43.5%)	15.3% (16.1%)	6.8% (6.1%)	35.1% (31.3%)
	教職大学院		56.7%	42.0%	38.7%	56.5%	19.7%	0.0%	45.5%
	計		49.6% (46.1%)	27.8% (25.0%)	26.1% (22.9%)	50.3% (44.8%)	12.3% (12.2%)	10.1% (10.9%)	34.3% (31.3%)

（注）1.　（　）内は前年度の数値である。
2. 採用率（%）は、採用者数÷受験者数である
3. 「国立教員養成大学・学部」とは、国立の教員養成大学・学部出身者をいう。
4. 「短期大学等」には、短期大学のほか、指定教員養成機関、高等専門学校、高等学校、専修学校等出身者等を含む。

設問Ⅱ：選択問題（志望する専門分野の問題を選択して解答すること）

【教育行政学領域】

以下の問いに答えなさい。問 1、問 2 で解答紙をそれぞれ 1 枚使用すること。

【問 1】　以下の図表は、「令和 7 年度コミュニティ・スクール及び地域学校協働活動実施状況調査（概要）」から抜粋したものである。この図を見て、次の問いに答えなさい。

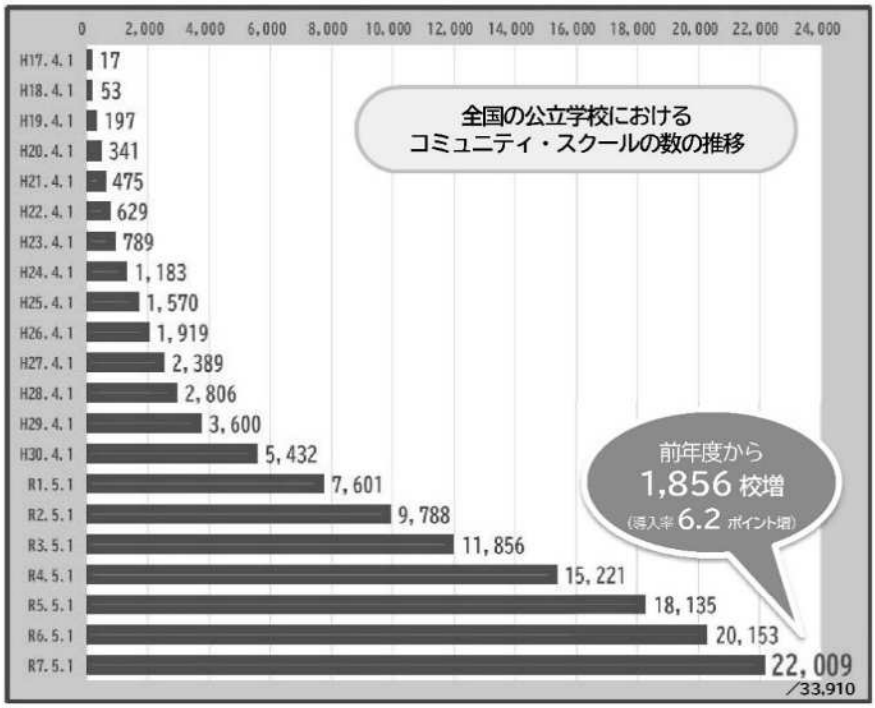
①全国の公立学校におけるコミュニティ・スクールの数の推移について、その背後にある政策的要因を説明せよ。

②校種別のコミュニティ・スクールの導入校数および導入率から読み取れることを記述せよ。

③上記①②の解答を踏まえて今後のコミュニティ・スクール政策が直面する課題を複数挙げ、その解決方策についてあなたの考えを述べよ。

全国の公立学校におけるコミュニティ・スクールの数

22,009 校（導入率 64.9%）（前年度から 1,856 校増（導入率 6.2 ポイント増））



（参考）全国の公立小学校、中学校、義務教育学校におけるコミュニティ・スクールの数

19,488 校（導入率 71.6%）（前年度から 1,546 校増（導入率 6.3 ポイント増））

（参考）全国の公立学校におけるコミュニティ・スクールの数（校種別）

校種	学校数	導入校数	導入率	前年度との比較
全て（再掲）	33,910 校	22,009 校	64.9%	1,856 校増（6.2 ポイント増）
小中義務のみ	27,233 校	19,488 校	71.6%	1,546 校増（6.3 ポイント増）
幼稚園	2,085 園	388 園	18.6 %	35 園増（3.0 ポイント増）
小学校	18,073 校	12,979 校	71.8 %	978 校増（6.2 ポイント増）
中学校	8,906 校	6,303 校	70.8 %	542 校増（6.4 ポイント増）
義務教育学校	254 校	206 校	81.1%	26 校増（3.5 ポイント増）
高等学校	3,423 校	1,490 校	43.5%	209 校増（6.2 ポイント増）
中等教育学校	35 校	9 校	25.7%	1 校増（2.8 ポイント増）
特別支援学校	1,134 校	634 校	55.9%	65 校増（5.5 ポイント増）

【問 2】　以下の語句から３つを選択し、具体例や関連する論点に言及しながらそれぞれ 300 字程度で説明せよ。

①差異のジレンマ
②変形労働時間制
③「Society 5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」
④差異法（社会科学の方法論としての）
⑤面接指導等実施施設

令和８年度（2026年度）（第２期試験）

東北大学大学院教育学研究科博士課程

（前期２年の課程・一般選抜）
グローバル共生教育論コース
入学試験問題（専門科目）

注　意

1　試験時間は１２０分。
2　問題紙は 1 枚（表紙を除く）、解答紙は 2 枚。
3　設問Ⅰ（共通問題）は全員解答すること。また、設問Ⅱ（選択問題）については、問題紙中に志望する専門分野ごとの問題選択の方法が記してあるので、それに応じて問題を選択の上、解答すること。
4　解答は、問題番号（設問Ⅱについては選択した専門領域）を明記の上、それぞれ別の用紙に記入すること。

設問Ⅰ：共通問題（全員解答すること）
シティズンシップの概念を定義したうえで、グローバル化する現代社会における教育とシティズンシップの関係について具体例を挙げながら論じなさい。

設問Ⅱ：選択問題（志望する専門領域の問題を選択して解答すること）

【多文化教育論領域】
文部科学省「外国人の子供の就学状況等調査（令和 6 年度）」によれば、令和6年度において、不就学の可能性のある外国人の子供の数は全国で 8,432 人であった。日本において外国人の子供が不就学になる要因と、その対策を論じなさい。

令和８年度（2026年度）（第２期試験）

東北大学大学院教育学研究科博士課程

（前期２年の課程・一般選抜）
教育情報アセスメントコース
入学試験問題（専門科目）

注　　意

1　試験時間は１２０分。
2　問題紙は6枚（表紙を除く）、解答紙は2枚。
3　設問Ⅰ、設問Ⅱの解答はそれぞれ別の用紙に記入すること。
4　全ての解答紙に受験記号番号を記入すること。

設問 I

以下の文章を読み，次の各問いに答えなさい。ただし問 1，2 で解答用紙 1 枚以内に収めること。

ここには、稲垣忠・佐藤和紀『ICT 活用の理論と実践　DX 時代の教師をめざして』，北大路書房，2021 年，51 頁 - 54 頁の「学校の成立とテクノロジ」，「情報技術と学校の矛盾」の節の文章が記載されています。

（出典：稲垣忠・佐藤和紀『ICT 活用の理論と実践　DX 時代の教師をめざして』，北大路書房，2021 年，51 頁 - 54 頁をもとに作成）

問 1　下線部①で「学校のかたちが大きく変わっていく可能性がある」と述べられているがその理由について，テクノロジの進化の歴史と最近の動向を踏まえて述べてなさい。

問 2　問 1 の解答をもとに，未来の学校はどうなるべきか，またそこではどのようにテクノロジが活用されるのかあなたの考えを述べなさい。

設問Ⅱ

以下の各問に答えなさい。問1～問3までで解答用紙1枚以内に収めること。

問1　図表1と図表2は，全国学力・学習状況調査における算数・数学および理科の平均正答率の男女比較を示している。なお，平均値差効果量（d）は，女子と男子の平均正答率の差の大きさの程度を標準化して評価する指標であり，0.2 を小さな効果，0.5 を中程度の効果，0.8 を大きな効果として解釈する。

図表3はＩＥＡ（国際教育到達度評価学会）による TIMSS（Trends in International Mathematics and Science Study）と呼ばれる算数・数学および理科の到達度に関する国際調査における平均得点の男女比較を示している。TIMSS は国際的に比較可能な尺度で測定されており，500 点が 1995 年調査の平均点（TIMSS 基準値）であり，それ以降の各調査の国際平均得点は公表されていない。

図表1～3の結果から，算数・数学および理科の学力に男女差があると言えるか否か，理由を挙げて論じなさい。理由については，全国学力・学習状況調査と TIMSS の結果の整合性や相違を明らかにして述べること。

図表1．全国学力・学習状況調査における算数・数学の平均正答率の男女比較

4ページに記載された出典の「表 2-3」をもとに作成した表が記載されています。

※平成 27 年度小 6 調査には，「性別」の変数無し。

図表2．全国学力・学習状況調査における理科の平均正答率の男女比較

下記出典の「表２-1」をもとに制作した表が記載されています。

※平成 27 年度小 6 調査には，「性別」の変数無し。

（出典：文部科学省　令和 5 年度委託事業　学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究(専門的な知見を活用した高度な分析に関する調査研究)報告書　A.令和 4 年度全国学力・学習状況調査の理科の結果を活用した専門的な分析・我が国の児童生徒の理科の学力や学習状況に関する傾向等の分析　https://www.mext.go.jp/content/20240514-mxt_chousa02-000035932_10.pdf をもとに作成）

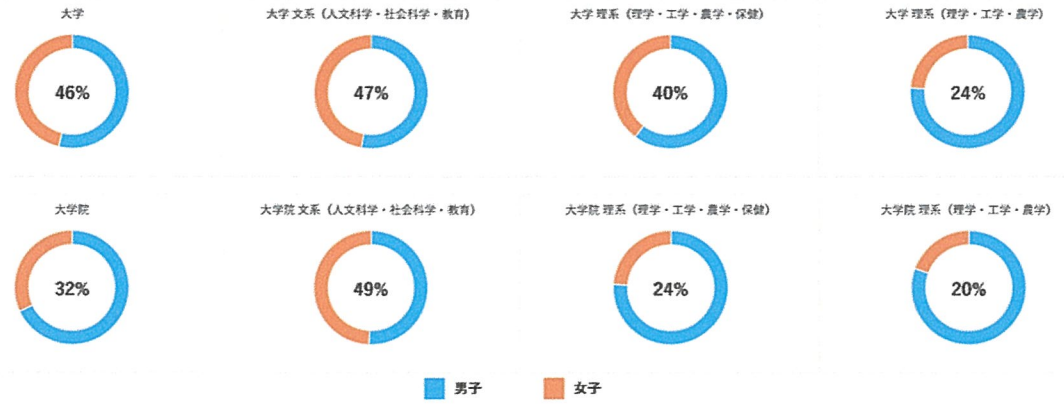
図表３. TIMSS における算数・数学と理科の平均得点の男女比較

下記出典の「3. 質問調査の結果（2）算数・数学、理科にみられる男女差」をもとに作成した図表が記載されています。

（出典：文部科学省・国立教育政策研究所　IEA 国際数学・理科教育動向調査 TIMSS2023 の結果（概要）　https://www.nier.go.jp/timss/2023/gaiyou.pdf をもとに作成）

問２　令和７（2025）年度の学校基本調査によると，大学および大学院の文系・理系別の女子の割合は図表４の通りであった。理系に女性が少ない理由として考えられる要因を述べなさい。

図表４　大学および大学院における文系・理系別の女子の割合



※（ ）内は学科系統分類表による区分であり，「保健」には，大学では医学・歯学・薬学・看護学，大学院では医学・歯学・薬学が含まれる。

（出典：政府統計の総合窓口 e-Stat で提供されている令和７年度学校基本調査のデータセット「関係学科別　学生数」および「専攻分野別　大学院学生数」のファイルをもとに作題者が作成）

問３　文部科学省が令和４（2022）年６月に公表した「令和５年度大学入学者選抜実施要項」では，入試方法について「一般選抜のほか，各大学の判断により，入学定員の一部について，以下のような多様な入試方法を工夫することが望ましい」とあり，その一つとして以下の記載がある。

(5) 多様な背景を持った者を対象とする選抜 家庭環境，居住地域，国籍，性別等の要因により進学機会の確保に困難があると認められる者その他各大学において入学者の多様性を確保する観点から対象になると考える者（例えば，理工系分野における女子等）を対象として，入学志願者の努力のプロセス，意欲，目的意識等を重視し，評価・判定する入試方法。

（出典：文部科学省　令和５年度大学入学者選抜実施要項
https://www.mext.go.jp/content/20220603-mxt_daigakuc02-000005144_1.pdf）

このような要請の下，令和５（2023）年度入試以降，理工系学部を中心に，女子のみを対象とした大学入学者選抜の募集枠である「女子枠」を導入する大学が増加している。大学入学者選抜において「女子枠」を導入することの是非について，あなたの考えを述べなさい。

令和８年度（2026年度）（第２期試験）

東北大学大学院教育学研究科博士課程

（前期２年の課程・一般選抜）
教育心理学コース
入学試験問題（専門科目）

注　　意

1　試験時間は１２０分。
2　問題紙は３枚（表紙を除く），解答紙は４枚。
3　解答は，問題番号を明記の上，それぞれ別の解答紙に記入すること。
4　志願する領域によって解答する問題が異なるので，注意すること。
　・**教授学習心理学**領域を専攻しようとするものは【共通】【A-1】【A-2】【A-3】の各問題に解答すること。
　・**発達心理学**領域を専攻しようとするものは【共通】【B-1】【B-2】【B-3】の各問題に解答すること。
　・**発達障害学**領域を専攻しようとするものは【共通】【C-1】【C-2】【C-3】の各問題に解答すること。
5　全ての解答紙に受験記号番号を記入すること。

＜教授学習心理学領域＞

【共　通】　全国の小学６年生を対象とした学力調査において，家にある本の冊数が多い（26 冊以上）家庭の子どもは，少ない（25 冊以下）家庭の子どもよりも，読解力テストの成績が高いという結果が得られた。この結果を見たある小学校の校長は,「家にある本の冊数が多いほど，子どもの読解力が高い。したがって，家庭でたくさん読書をすることによって読解力が向上するのだ」と考えた。
上記の調査結果について，この校長の考えとは異なる解釈を２つ述べなさい。

【Ａ－１】　比較実験を行う際，実験群および統制群に対して対象者を無作為に割り付ける必要がある。ところが，授業場面で実験を行う場合，無作為割り付けができず，クラス単位で割り付けるという手続きをとることが多い。この手続きはいかなる方法論上の問題を生むか，説明しなさい。

【Ａ－２】　学習方略にはさまざまなものがあるが，望ましい方略として「体制化方略」があげられることが多い。体制化方略とは何か，その方略が望ましいのはなぜか，説明しなさい。

【Ａ－３】　知識学習の成果を事後テストなどで評価する場合において,「できる」という観点からの評価と「わかる」という観点からの評価を区別したい場合，どのようなテスト課題の工夫が必要であるか。具体的な学習課題を例に説明しなさい。

＜発達心理学領域＞

【共　通】　全国の小学６年生を対象とした学力調査において，家にある本の冊数が多い（26 冊以上）家庭の子どもは，少ない（25 冊以下）家庭の子どもよりも，読解力テストの成績が高いという結果が得られた。この結果を見たある小学校の校長は，「家にある本の冊数が多いほど，子どもの読解力が高い。したがって，家庭でたくさん読書をすることによって読解力が向上するのだ」と考えた。
上記の調査結果について，この校長の考えとは異なる解釈を２つ述べなさい。

【Ｂ－１】　人間の発達において，「遺伝」と「環境」のかかわりが必ずしも独立ではなく，相互に影響しあっていることを具体的な例を挙げて説明しなさい。

【Ｂ－２】　J.ピアジェ(J. Piaget)の認知発達理論における「前操作期」について，前後の段階と比較しながら説明しなさい。

【Ｂ－３】　発達研究における横断的方法と縦断的方法について，それぞれの利点と限界について説明した上で，人間の発達を科学的に明らかにするためにはどのようなデータ収集の方法が必要であるかについて，あなたの考えを述べなさい。

＜発達障害学領域＞

【共　通】　全国の小学６年生を対象とした学力調査において，家にある本の冊数が多い（26 冊以上）家庭の子どもは，少ない（25 冊以下）家庭の子どもよりも，読解力テストの成績が高いという結果が得られた。この結果を見たある小学校の校長は，「家にある本の冊数が多いほど，子どもの読解力が高い。したがって，家庭でたくさん読書をすることによって読解力が向上するのだ」と考えた。
上記の調査結果について，この校長の考えとは異なる解釈を２つ述べなさい。

【Ｃ－１】　我が国におけるインクルーシブ教育システムの概要，及びこれを実現するための仕組みについて説明するとともに，インクルーシブ教育システムの構築に向けて今後検討が必要と考えられる課題について論じなさい。

【Ｃ－２】　注意欠如多動症の抑制機能を測定するための典型的な課題を１つ以上取り上げて説明しなさい。

【Ｃ－３】　自閉スペクトラム症におけるミラーニューロン機能不全仮説について説明しなさい。

令和８年度（2026年度）（第２期試験）

東北大学大学院教育学研究科博士課程

（前期２年の課程・一般選抜および社会人特別選抜
および外国人留学生特別選抜）

臨床心理学コース
入学試験問題（専門科目）

注　　意

１．試験時間は１２０分。
２．問題紙は１枚（表紙を除く）、解答紙は５枚。
３．解答は所定の用紙に記すこと（設問Ⅰ～設問Ⅲの解答は各１枚の解答紙を用いて、設問Ⅳの解答は２枚の解答紙を用いて、(1)～(4)を１枚目、(5)～(8)を２枚目に記入すること）。
４．全ての解答紙に受験記号番号を記入すること。

・・・・・・・・臨床心理学コース・・・・・・・・

【設問Ⅰ】 不治の病に罹患し、死を前にしたクライエントの苦痛を軽減する支援において留意すべき事柄として、①心理職のクライエントに対する態度、②心理職の死生観、③医師と心理職との協働のあり方、④その他あなたが重要と感じる事柄について述べなさい。ただし、クライエントの意識状態は明晰である場合とする。 (20点)

【設問Ⅱ】 心理療法の効果要因について、ランバート（Lambert）らの研究などを参考に、考えるところを述べなさい。 (20点)

【設問Ⅲ】 不登校の中学生とその保護者が来談した際に、心理職として重要と思うアセスメントの視点と初回面接の方針について述べなさい。 (20点)

【設問Ⅳ】 以下の用語をそれぞれ5行程度で説明しなさい。 (各5点)

（1） 児童相談所

（2） 抗精神病薬

（3） ストレンジ・シチュエーション法

（4） ローカス・オブ・コントロール

（5） 交流分析

（6） 無条件の肯定的な配慮（unconditional positive regard）

（7） 投影法

（8） 確認的因子分析

（以下余白）